

資料
紹介

恩師 ジェームズ・

バサード博士の紹介 (一)

(James Herbert Steward Bossard)

篠崎茂穂

ペンシルベニア大学の大学院でバサード博士より最初に社会福祉学を学んだのは一九二八年で、其の後三十年迄に社会的負債者階級 (Social Debtor-Classes) と児童福祉学等を学ぶ機を得た。之が私が福祉学に興味を持った最初で、其の後二十年余りを経過し一九五二年に再び教授の下に社会変動論を学んだ。此の二十数年間に教授の教え振りと言義の内容とは色々変化のあることに気付いたが、特に一日講壇から我々学生に向つて、私は社会変動に就いて約四十年講義して来たが未だに其の変動を測る尺度が見付からぬので理論の体系付けがまだ出来ないで困つているが諸君から何か智慧を拝借出来まいかと云われた。教授の学者らしい謙遜な態度には私を強く打つものがあつた。以来特に講義に興味を持つて聞くと共に教授の学会其他に於ける業績の多大な事に驚かされた。だが残念な

事には日本の学会には余り知られていないらしい。其処で本誌を通じ日本福祉学会関係諸氏に紹介したいと考えたのである。

先ず教授の学歴の大体を紹介したい。先生は一九〇九年マレンバーク大学を卒業し、一九一一年にペンシルベニア大学で修士号を得、一七七年に博士号を得られた。其の後一九四八年母校マレンバークより人文名譽博士号を授与された。次に先生の職歴であるが、先生は一九一一年母校マレンバークにて歴史及び社会科学の講師として就任され一四年より一七年迄助教として就職に在つた。一九一七年ラファイエット大学に転任し、経済及び社会学の教授となつた。一九二〇年ペンシルベニア大学に転任し社会学部助教となり、一九二五年正教授に任命された。一九三八年同大学内の児童發育に関する特別研究員となり、今日に至つてゐる。又一九五二年以来同大学医学

部の精神病科の社会科学の教授をも兼任する様になり、更に一九二九年以来三〇年、三三年、三五年とカルフォルニア大学の夏期大学で教鞭を取り、一九四七年、四八年にはエール大学の教授をも兼任した。

右の様な学歴及び職歴から推測出来る様に教授が社会的実際の活動に関心を持たれる事も之又必然で、其の具体的なものには次の様なものである。米国社会学会の副会長を二期に渡り勤め、東部社会学会の会長、家族計画ペンシルベニア州連合会会長、同州ランズダウン P・T・A 会長を各々四年間勤め、更に最近迄同州立犯罪人保護観察会役員を勤めた。

扱て次に先生の研究生活の一面を紹介する。先生の主な研究テーマは (一) 社会変動と社会混乱、(二) 家族生活と児童の成長である。前者に関しては「社会福祉の問題」(Problems of Social Well-Being) を一九二八年に出版し、「社会変動と社会問題」(Social Change and Social Problems) を一九三四年に出版したが之は一九三八年に改訂出版した。第二のテーマに就いては「児童成長の社会学」(The Sociology of Child Development) を一九四八年に初版を出し一九五四年に改訂再版を

出した。「家族生活の儀式」(Ritual in Family Living)「家族状況」(Family Situations)「大家族制度」(The Large Family System)「二人の結婚・二人の信仰」(One Marriage: Two Faiths)「結婚と子供」(Marriage and the Child)「親子」(Parent and Child)等を出版したが其の内にはE. S. ホール氏との共著のものもある。此の外教授は多くの業績を持つておられるが、大体共著を合わせると三十五種、其の他約九十の論文を The Annals of The American Academy of Political and Social Science, The American Sociological Review, The American Journal of Sociology, Social Forces, Sociology and Social Research, Child Development and Mental Hygiene, 等に発表している。

教授の現今の主な研究は子供の行動様式に影響を与え又之を決定する社会要因に関するものである。先生は之を児童の行動に対する状況的指引(The Situational Approach to Child Behavior)と呼び、社会学者は人間の行為の特性や特徴を研究する他の科学者の研究の援助を待たねば解決の出来ない様な社会的境遇に就いての研究を行うべきであると強調している。教授

が云う状況とは家庭や家族の中に在るもので、家庭の構造、家族間の相互作用の過程や家族の文化様式等に分類している。更に教授は学校の状況、子供の集団(Gang)や仲間(peer)の状況、隣人並びに更に大きな社会状況の研究を強調する。然して此の各々の立場から分類し検討されねばならぬと云う。先生が尚一層強調するのは、此の様な研究は先ず普通の子供に就いてなされねばならないと云う点である。そしてその研究に基づいて異常児の成長、非行少年少女等の研究がなされる可きであつて、之は医学教育に於て先ず一般病理が研究されその研究に基づいて病状即ち病人の状況が研究されると同じ方法であると云うのである。

今一つ教授が特に強調するのは次の点である。心理学者、サイキアトリストや其の他の学者が行動している人間を系統立てて、科学的に研究しているのに我々社会学者は人間に行動を起させ又影響を与えながら此の状況の研究には手をつけていないが此の事はなされねばならない事である。教授は云う、『実験室でアミーバーの運動を知る為には科学的であり得るのに何故児童が生活する家庭や学校の生活状況に同様に科学的

であり得ない事があり得ようか」と。教授は此の研究の試みを「家庭の状況」と「児童発育の社会学」との著書の中で発表している。

目下先生は全集の発行を企図している。各冊は百のケーススタディーに基づき家族の大きさが如何に児童の成長に影響を与えるかを知らんとするものである。「大家族制度」は百の家族を研究し、各家庭は六人以上の子供のあるものを対象としている。同じ様な本で「二人の子供のある家庭」(The Two-Child Family)と云うのを準備している。これは百の家庭を研究したものである。最後に「中位の家庭の子供」(The In-Between Size Family)と云う著書を出版するつもりだが之は三人から五人迄の子供のある家庭に於ての子供の成長を取り扱うものである。

以上の様にバサード教授の研究は次第に独創的になり、多くの業績を積まれると共に、学者としての良心は益々深く謙遜になつて行かれる様である。全く尊敬し見做す可き事と考えさせられる。次号に於て教授が出版した本の内容の一部を紹介して恩師の紹介をつづけ度いと思ふ。